様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０８３５

研究課題名（和文）近世における征韓論の系譜を探る

研究課題名（英文）Think about the root of Seikanron in the early modern times.

研究代表者
須田　努（Suda, Tsutomu）

明治大学・公私立大学の部局等・教授

研究者番号：７０４６８８４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,700,000円、（間接経費）　1,110,000円

研究成果の概要（和文）：後期水戸学、会沢正志斎の思想との関連、横井小楠との相違から吉田松陰の独自の行動原理を解明した。解収集した史料分析を行い、吉田松陰が征韓論を形成するに至る経過を考察した。この成果は、成均館大学校におけるシンポジウムで報告を行い、「横井小楠と吉田松陰」（趙景達他編『東アジアの知識人』1、有志舎、2013年）としてまとめた。一九世紀、ペリー来航によって形成された危機意識は、富国強兵の論理へと行き着いたことの意味とその後の影響について考察した。征韓論に関わる対馬藩の動向に関しては、史料収集を行ったが、成果の公表には至っていない。今後はこの問題を解決したい。

研究成果の概要（英文）：Yoshida Shoin's original behavioral principle was solved from relation with the thought of second-half Mito Gaku (Aizawa Seishisai), and the difference with Yokoi Shounan.I conducted historical-records analysis which carried out solution collection. As a result, I have considered the progress in which Shoin formed a Seikanron. I reported this result at the symposium in a SungyunKwanUniversity (South Korea).
The sense of crisis formed by the 19th century and Perry arrival reached to the logic of a Hukokukyouhei. I considered the influence of after that the logic of a Hukokukyouhei. I performed historical-records collection about the trend of the Tsushima han in connection with a Seikanron. However, the result is not releasable. I would like to solve this problem from now on.

研究分野：人文

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：吉田松陰　征韓論　水戸学　横井小楠

１．研究開始当初の背景

（１）近世人の朝鮮観に関する研究

ここで言う近世人とは為政者・知識人・民衆の総体を指している。このうち，為政者・知識人の朝鮮観に関する研究は池内敏『大君外交と「武威」』（名古屋大学出版会，2006 年），鈴木文「延享‐寛延期の『朝鮮ブーム』に見る自他意識」（『歴史評論』651，2004 年）など数多くあるが，民衆の朝鮮観に関しては，倉地克直『近世日本人は朝鮮をどうみていたか』（角川選書，2001 年）のなかで部分的に触れられているにすぎず，本格的に論じた研究は須田努「江戸時代民衆の朝鮮・朝鮮人観」（『思想』1029，2010 年‐業績一覧 3）しかない。

（２）吉田松陰の朝鮮観に関する研究

吉野誠『明治維新と征韓論』（明石書房，2002 年）が，現在の研究水準を示しているが，近代的征韓論は吉田松陰が創り出したという前提から論じられたものとなっている。

（３）対馬藩の朝鮮観に関する研究

対馬藩における朝鮮問題をあつかった研究として，木村直也「幕末の日朝関係と征韓論」（『歴史評論』516 号，1993 年），鶴田啓『対馬から見た日朝関係』（山川出版社，2006 年）などがあるが，外交政策論が中心となっている。

２．研究の目的

本研究の目的は，近世人の朝鮮・朝鮮人観の解明を前提として、近代日本の朝鮮侵略と朝鮮植民地化への原初となった征韓論の系譜を近世社会にさかのぼり考察することにある。吉田松陰，及び対馬藩の朝鮮観を分析することが，本研究の中心となる。従来の研究において，征韓論の起点は吉田松陰にあったとされているが，本研究では、吉田松陰を近世社会のなかに位置づけ，彼の朝鮮侵攻論を近世人の朝鮮観の枠組みから解析する。さらに松陰に直接影響を与えた会沢安・頼山陽の歴史観の分析も加える。そしてさらに，対馬藩における征韓論の形成過程とその特質を解明する。以上の研究を通じて，日本の朝鮮植民地支配の原点，その心性を問い直す。

３．研究の方法

本研究は以下の 3 つのサブテーマに沿って進めた。

（１）サブテーマ 1：近世人の朝鮮観に関する研究成果

従来の研究が薄い，民衆の朝鮮観に関する研究が中心となる。メディア・スタディーズの方法論を援用し，民衆に大きな影響を与えた浄瑠璃・歌舞伎作品を解析する　これらの成果は、すべて論文として発表した。

（２）サブテーマ 2：吉田松陰の朝鮮観に関する研究

松陰に影響を与えた会沢安・頼山陽の国体論・歴史認識を分析したのち，松陰の弟子たちの思想を解析する

（３）サブテーマ 3：対馬藩の朝鮮観に関する研究

対馬藩家老大島友之允らの心性を解明することを通じて，19 世紀における対馬藩の政治的立場を分析する。

４．研究成果

（１）サブテーマ 1：近世人の朝鮮観に関する研究

朝鮮・朝鮮人が登場する浄瑠璃・歌舞伎作品を網羅的に収集し、これをメディアと位置づけ作品分析を行った。その結果、朝鮮通信使が来航していた時期（18 世紀中まで）と来航が途絶した時期（18 世紀後半以降）とでは、作品中で描かれる朝鮮・朝鮮人の表現（表象）が相違していることを突き止めた。以上を前提として、次のように、江戸時代民衆の朝鮮・朝鮮人観を整理した。

①朝鮮通信使来航時期（18 世紀中まで）

近松門左衛門や紀海音の浄瑠璃作品には、弱い朝鮮、軟弱な朝鮮人という語りが行われていることが分かった。また、近松半二による『天竺徳兵衛郷鏡』や『山城の国畜生塚』を分析することによって、江戸時代の民衆の中にも「武威」に対する意識が濃厚であったことを突き止めた。そして、享保期以降形成された「天竺徳兵衛」物によって、日本に潜入し、日本人に怨みをもった朝鮮人が反乱・謀反を起こすが失敗する、というテンプレートが形成されていた事も分かった。

②朝鮮通信使来航の途絶時期（18 世紀後半以降）

鶴屋南北は、「天竺徳兵衛」物や『高麗大和皇白浪』という歌舞伎作品を作成した。そこでは、日本に祖国を滅ぼされた朝鮮人の恨みは消えない、という新機軸が出されていた。また、登場人物をめぐって、中国と朝鮮との綯いまぜがおこり、民族差別としての言説も登場していた。朝鮮通信使が途絶したことによって、朝鮮・朝鮮人に対する認識は低下し、さらに、「武威」を基盤にする蔑視観から、感情的・感覚的嫌悪観まで形成されていたことを突き止めた。

以上の成果に関しては、すべて論文で発表している。

（２）サブテーマ 2：吉田松陰の朝鮮観に関する研究成果

①松陰に影響を与えた会沢安の国体論・歴史認識を分析した。会沢国体論の特質を解明し、一君万民へと至る問題を吉田松陰の国家観へと結びつけた。これに関して国際シンポジウムでの報告、論文発表を行った。

②吉田松陰の社会的環境を理解する。

吉田松陰が居住し政治・思想活動を展開した山口県萩市を中心にフィールドワークを実行した。萩博物館，萩藩の学問所である明倫館，松下村塾・松陰生家，松陰の弟子である木戸孝允・高杉晋作などに関連する史跡を巡見・踏査した。また，萩焼をはじめた朝鮮人陶工の村が松陰生誕地に近くに存在しており，これが契機となり彼は朝鮮を意識した，との見解があるが（奈良本辰也『吉田松陰』岩波文庫，1951 年），この論点も現地を巡見・踏査することで確認した。萩焼きの現在当主である坂高麗左衛門氏のインタビューも実行した。その結果、松陰は、長州藩が抱えた朝鮮人陶工たちを格別に意識（差別）していたわけではないことが分かった。

③吉田松陰の国家観・朝鮮観の解明

吉田松陰関係の史料を網羅的に分析し、横井小楠との比較から、以下のように、松陰の国家観の特質を分析した。

嘉永期、松陰は「君臣上下一体」論を提起しつつも、国体の論理を内面化することはできなかった。安政期、松陰は野山獄での幽閉生活のなかで、教養を蓄積し、ようやく護るべき国体を“発見”（論理化）することが可能となった。しかし、この論理は、長州藩の碩学山県太華によって否定されてしまう。そして、幕府が日米通商修好条約を締結するに至り、松陰は思想を捨て、行動を選択するようになる。松陰は、自己の学統（弟子）をこの行動（蹶起）の担い手として期待していた。しかし、高杉晋作や久坂玄瑞など、松陰が信頼する弟子たちは、松陰の過激な言動（老中殺害など）について行けず、松陰は孤立していく。この学統崩壊の危機を回避しつつ、幕府批判（否定）へと向かう論理として、“弱い朝鮮”に侵攻するというプランを形成していた。しかし、このプランは一切影響力がないものであった。吉田松陰の朝鮮侵攻論は、近代的征韓論とは相違して、多くの近世人が抱いていた朝鮮・朝鮮人観の延長にあったといえる。

（３）サブテーマ 3：対馬藩の朝鮮観に関する研究成果

①朝鮮通信使廃止後における対馬藩対朝鮮外交の概要確認

『大系朝鮮通信使』（明石書店，1993 年）など朝鮮通信使関係史料や，『対馬宗家文書』（古文書　明治大学中央図書館所蔵）を読解し，朝鮮外交に触れた箇所や朝鮮意識を記した部分，さらに 19 世紀の外交問題に発展する可能性のあるものを中心に解析を進めているが、途中である。

②幕末における対馬藩政の概要確認

対馬藩内部の政治対立の問題を分析する。長崎県立対馬歴史民俗資料館での史料調査（3 泊 4 日）を実行した。しかし、史料の解析には至っていない。

（４）派生した研究成果

近世人の朝鮮・朝鮮人観を研究する中で、日本各地に存在する、朝鮮人由来の祭り＝「唐子踊り」「唐人踊り」などを、現地調査を踏まえ分析することができた。

とくに、三重県津市（旧　藤堂藩領）にある「唐人踊り」について、以下のような分析を行った。津の「唐人踊り」は八幡神社の祭礼に登場する。この八幡神社は、一六二三年（寛永九年）に津藩藤堂家によって創建されたが、その背景には、藤堂家が朝鮮通信使の往復を接待したことが契機となっていたことを解明した。さらに、朝鮮通信使が途絶した後、この祭りは、異国風俗がデフォルメされていったことも突き止めた。

（５）成果の統合

サブテーマ１と２、さらに派生した研究成果に関しては、すべて発表論文としてまとめ、韓国における国際シンポジウム等での報告も行った。

サブテーマ３について、史料調査とフィールドワークを実行したが、現段階で論文執筆の段階に至っていない。サブテーマ２について、想定した以上の成果が期待でき、また、新たな方向性（派生した研究成果）が生まれたため、これの実行に時間をとられたからである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1 件）

①<u>須田努</u>「江戸時代庶民の対外認識」『歴史地理教育』№791　pp.72～77

〔学会発表〕（計　6　件）

①<u>須田努</u>「イコンの崩壊から―「現代歴史学」のなかの民衆史」歴史学会　第 37 回大会報告、2012 年 12 月 2 日

②<u>須田努</u>「日本の史学史における民衆史研究」韓国歴史問題研究所・アジア民衆史研究会　合同国際シンポジウム、2013 年 2 月 22 日　ソウル

③<u>須田努</u>「「戦後歴史学」で語られた民衆イメージを止揚する」成均館大学　国際シンポジウム「19 世紀、東アジアにおける民衆主体と社会変容」2013 年 7 月 20 日、ソウル

④<u>須田努</u>「朝鮮侵攻論の深淵―近世の朝鮮・朝鮮人認識―」成均館大学　国際シンポジウ

ム　成均館大学校東洋史学術院 HK 財団 2012 年度企画学術会議（国際シンポジウム）2013 年 8 月 24 日　ソウル

⑤須田努「中国化の限界から脱中国化へ向かう日本の近世―民衆の自他認識―」日韓文化交流基金国際シンポジウム、2013 年 10 月 27 日　東京

⑥須田努「19 世紀前半における知識人の国体と道観念」成均館大学　国際シンポジウム「東アジアにおける儒教」2013 年 8 月 15 日～16 日　ソウル

〔図書〕（計　6　件）
①須田努「江戸時代　民衆の朝鮮・朝鮮人観」趙景達他編『「韓国併合」100 年を問う』pp.170～190、岩波書店、2011 年

②須田努「日本史教育のなかの「韓国併合」」国立歴史民俗博物館編『「韓国併合」100 年を問う』pp.408～414、岩波書店、2011 年

③須田努「近世人の朝鮮・朝鮮人観」原尻英樹他編『日本と朝鮮　比較・交流史入門』pp.103～128、明石書店、2011 年

④須田努「通信使外交の虚実」趙景達編『近代日朝関係史』pp.29～63、有志舎、2012 年

⑤須田努「明治維新と征韓論の形成」趙景達編『近代日朝関係史』pp.64～92 有志舎、2012 年

⑥須田努「横井小楠と吉田松陰」趙景達他編『講座　東アジアの知識人』pp.48～66 有志舎、2013 年
〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：
〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　須田努　（明治大学）
研究者番号：70468841

(2)研究分担者
　　（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：